別記様式第６

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士（　文　学　）	氏 名	田邊　久美子
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy
(ジェラード・マンリー・ホプキンズと空想の詩学)

論文審査担当者

主　　査	教　授	デイヴィッド・ヴァリンズ
審 査 委 員	教　授	吉中　孝志
審 査 委 員	教　授	地村　彰之
審 査 委 員	東京大学　准教授	大石　和欣

〔論文審査の要旨〕

本論文は，G. M. ホプキンズ（Gerard Manley Hopkins, 1844-89）の詩学における「空想」(fancy) の概念に焦点を当て，それが彼の理論と実践にとって必要不可欠であったことを，先行する詩人たちの作品や文芸批評家の論と照らし合わせ，また，ホプキンズに影響を与えたと考えられる宗教的，芸術的，文化的背景をもとに考察したもので，中心となる以下の３つの章で構成されている。

まず，Chapter 1: The Foundation of Hopkins' Poetics of Fancy では，ホプキンズの「空想」と「想像力」(imagination) の概念が先行の詩人・文学批評家，S. T. コールリッジとラスキンの影響を受けていることについて論じている。本論文の核となる重要な点として，筆者は，詩人ホプキンズが，コールリッジとは違って，詩作において「想像力」よりも「空想」の力を優位においたことに注目している。そしてその理由を，ロマン派的な主観性中心主義への反動に由来するものであると指摘している。また，視覚を最終的に否定しようとする傾向にあるロマン主義的「想像力」とは違って，「空想」は，徹底した対象観察に始まり，最後まで細部の多様性を強調する特性を持つことを指摘し，ゴシック・リヴァイヴァルやラファエル前派などの芸術に見られるリアリズムと通底するものであると論じている。

続く Chapter 2: "The Language of Inspiration" and "Parnassian": The Two Kinds of Poetic Diction では，ホプキンズが詩語 (poetic diction) を「霊感の言葉」と「高踏的な言葉」に分け，前者を「空想」に，後者を「想像力」に対応させて用いていることを説明している。「霊感の言葉」とは，一種の没我の境地である「空想」が可能にする言葉であるという指摘は卓見である。また，前者がシェイクスピア，後者がテニスンやワーズワスに見られることを指摘するホプキンズの論が敷衍されて考察されている。特にシェイクスピア劇，*The Merchant of Venice*，*As You Like It*，*Twelfth Night* の分析は興味深い。そこでは男装する両性具有的な女性たちに着目してホプキンズの "Floris in Italy" と題された未完の劇への影響関係が考察され，男装の女性が「空想」の持つ装飾性・多様性・非合理性を表象し，中心と周縁を逆転させ，隠された真実を露わにする動作主となっていると論じている。

最終章である Chapter 3: The Influence of Hopkins' Conversion to Catholicism on his Poetics of Fancy では，ホプキンズの「空想」が同時代の思想的潮流の影響を受けていたことについて論じている。それはホプキンズが英国国教会からカトリックに改宗する理由ともなった，ジョン・ヘンリー・ニューマンを中心として始まったオックスフォード運動やラスキン，ラファエル前派による中世主義の影響に関する考察である。ホプキンズにとってゴシック，バロックといった美学的影響のみならず，「空想」の詩学と彼の宗教観を一致させたのは，ローマ・カトリックの聖餐における実体変化の教義であった，と筆者は論じている。最終的に，彼の「空想」概念が，その詩学の根幹となる「インスケイプ」の概念

と一致することを結論として提示している。ロマン派詩人の「想像」概念に関しては議論上の二項対立を作るための単純化が見られること，ホプキンズと英国 17 世紀の詩人との比較が表層レベルに留まっていること，といった課題は残るが，総じてホプキンズの理解しがたい詩を鑑賞に堪えうるレベルまで説明し，英文学史上の影響関係を解きほぐすことに成功した，極めて意義のある研究成果である。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。